

令和7年 総務文教常任委員会行政視察報告書



視察日程：令和7年10月20日(月)～10月22日(水)

視察先：東京都福生市「防災食育センター」
神奈川県横浜市「國學院大學たまプラーザキャンパス」
東京都渋谷区「國學院大學渋谷キャンパス」
東京都新宿区「東京都教育委員会」

派遣委員：安樂良幸(委員長)、荻野仁史(副委員長)
寄谷猛男、柴田文男、藤田哲也、好川 章、福井雅章、高橋江海子
関藤龍也

随 行：小島亜美(議会事務局)

1 全 般

任期4年の折り返しの年となる10月20日(月)から22日(水)間、2泊3日の行程で総務文教常任委員会の行政視察を実施した。

本視察の狙いは大きく3点あり、その1点目は近年多発している線状降水帯発生に伴う集中豪雨による河川の氾濫や、道東や東北、北陸で頻発している地震に連動した大規模地震などに備え、福生市の「防災食育センター」を視察して災害発生時における避難者への給食支援と平時における小・中学生の食育について学び、滝川市の防災計画や小・中学生の食育に資すること。

また、2点目は都会である東京都と田舎である滝川市におけるALT（外国語指導助手）の運用実態や、問題点などを把握して本市の外国語教育に生かし、グローバルな人材育成に資すること。そして、3点目は國學院大學北海道短期大学部が所在するまちな市の議会議員として、「渋谷キャンパス（本学）」及び横浜市に所在する「たまプラーザキャンパス」を視察して、議員としてのスキルアップを図るとともに、理事長以下大学関係者と懇談し、本市に所在する北海道短期大学部の存在意義や必要性を再認識することである。

全体を通じ本視察はそれぞれの場所において、委員各位から積極的な質疑もあり、財政規模や補助金メニューなど異なる点は多々あるが参考になることも多く今後の議員活動の資を得ることができたものと思料する。

2 視察状況

(1) 福生市「防災食育センター」について

ア 視察日時及び対応者

(ア) 視察日時

令和7年10月21日(火) 9時30分から10時30分

(イ) 対応者

福生市議会副議長 三原 智子 氏

教育部学務課長 大島 秀貴 氏

教育部学務課学務・給食係主査 神林 俊 氏

総務部防災危機管理課防災危機管理係主査 新井 裕一郎 氏

イ 概要

(ア) 副議長挨拶

三原副議長から歓迎の言葉、福生市の地域特性、特に米軍横田基地の所在に伴う街の景観、災害に対する取組みなどについてご挨拶をいただいた。



(イ) 福生市における防災食育センター設置の経緯について

福生市については平成23年に発生した東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所における原子力災害を機に平成25年「福生市地域防災計画」を修正し、福東地区に避難所機能・拠点機能・備蓄機能・応急給食機能等総合的な防災機能を併せ持つ「災害時対応施設（防災食育センター）」を整備することとし、平成26年6月には基本計画を策定し、整備にあたっての基本方針を定めている。

併せて、平時においては応急給食機能を活用し、給食センターとして市内中学校に給食を提供している。

(ウ) 施設概要及び主要な防災設備について

a 敷地面積は 9,807.58 m²で、建築面積 3,847.82 m²であり、規模構造は鉄骨造・RC造地上2階である。総事業費は約40億円であり、防衛省補助金30億円、東京都総合補助金3億円の補助金が充当されている。なお、建設用地は国有地(防衛省管理)で無償使用しており、平成29年9月に稼働を開始している。

b 応急給食機能は、災害発生後4日目以降最低3日間、市内の避難生活者約1万5千人に対し、1人1日1回おにぎり2個と温かい汁物を提供でき、アレルギーにも配慮されている。災害時の調理機として、都市ガス・プロパンガス両対応の炊飯システムや屋外で使用できるコンロカートに配備しており、最も労力がかかるおにぎりは1時間に最大1,800個できる自動成型機を導入している。避難所機能においては、約310名の収容が可能で、防災広場に救護用テントや簡易トイレを設置し、帰宅困難者の一時滞在場所として活用できるとともに、都市ガス及びプロパンガス対応の非常用発電機も設置されている。

また、災害時に支援物資や応援物資を受け入れする拠点としての機能も有するとともに、施設の備蓄機能は毛布等防災用備品、応急給食用として、米4,500kg(おにぎり90,000個分)と汁物材料45,000食分を備蓄でき、平時は学校給食で使用して入替を図っている。



※出典：視察資料「福生市防災食育センター（防災施設編）」



備蓄倉庫



災害時用テント

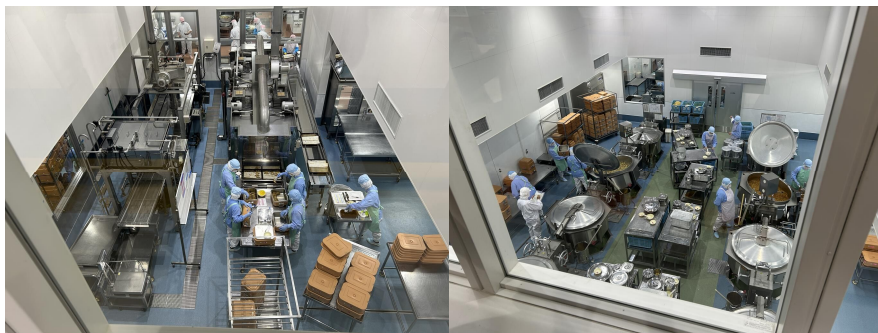


給食作り体験コーナー

(エ) 応急給食等訓練について

年に1回、福生市総合防災訓練の一環として、都市ガスからプロパンガスへの切り替え作業から、炊飯作業、おにぎり成型機を用いたおにぎり成型までの一連の流れを確認する応急給食訓練をしている。成型したおにぎりはメイン会場となる学校の児童等が試食している。

その他、地域の自主防災組織を中心とした避難所開設・運営、物資輸送訓練に防災食育センターを活用している。



実際に給食を作っている様子

ウ 視察に参加した各委員の所感

- 本市における災害発生時の避難者への給食は、初期段階では備蓄している保存食やロングライフパンなどでの対応となるが、避難が長期化した場合の給食は、現状、自衛隊の支援に依存しており、今後、給食センター活用についても検討する必要があると感じた。また、福生市は横田基地が所在する関係から防衛省の「特定施設関連市町村」になっており、多額（30億円）の補助金が充当されており、実行の可能性は別として、本市も「特定施設関連市町村」を目指すべきだと思う。

- まず初めに、拝島駅に職員の方達がわざわざ迎えに来ていただきました。笑顔で気持ちの良い対応をしてくださり、車内でも運転手の方が進んで福生市の米軍基地のお話をしてくださり、視察前から期待が膨らんでおりました。防災食育センター内では、各委員から様々な質疑が飛び交っていました。中でも私が1番注目したポイントは、働いている方の動きでした。お昼前に伺ったため、センター内で給食の準備をしていたが、動きが連動しており、無

駄のない動きに見えた。おそらく日頃から万が一の時に備えて、志高くお仕事に取り組んでいるのだと感じた。

○ 災害時の食事はレトルト食品や乾物、パンという考えだったので、おにぎり、汁物などの応急給食を提供できる備蓄体制は日常生活により近い食事を提供する体制として参考になった。また、レトルト食品等は更新に無駄が発生しやすいが、コメなどは学校給食で日常的に入替するので無駄になりにくく、防災と給食提供をうまく組み合わせていると感じました。

○ 福生市では、東日本大震災を契機として、市民の防災意識の高まりを受け、防災食育センターの整備に取り組み、平成 29 年 9 月から本格稼働を開始した。平時には、市内小中学校に学校給食を提供する一方、災害時には帰宅困難者などの避難所として活用するほか、1 万 5 千人分に 1 日 1 回おにぎり 2 個と汁物を応急食として提供する。また、避難所用の備品を備蓄し、支援物資や応援部隊を受け入れる災害拠点としての機能をもつ。特筆すべきは、建設費 40 億円のうち 30 億円が「特定防衛施設周辺整備調整交付金（9 条）」で賄われているということだ。横田基地の周辺自治体としての適用だ。同交付金は平成 23 年 4 月に法律が一部改正され、公共用施設の整備とともにソフト事業や、事業ごとの基金化も可能となり、柔軟性が増している。

本市においても、駐屯地がある中で、同様の交付金を得る方法を考える必要も感じられた。

○ 給食センターとしての衛生・効率性に加え、災害発生時の迅速な支援拠点となるよう、備蓄倉庫や炊き出し設備が一体的に設計されている点が印象的でした。通常業務と防災機能を兼ね備えることで、平時の運用コストを抑えつつ、有事の際に即応のできる仕組みは、今後の地域防災拠点整備の参考となりました。

○ 福生市は、米軍横田基地があり、防災食育センターも総工費 40 億円の 3/4 は防衛省、福生市が 1/4 とのこと。防災食育センターは、「避難所」＋「防災

拠点」＋「食料備蓄」＋「応急給食」＝防災機能としての基本が整備されていると感じた。

- 全国の自治体が給食提供における諸課題に苦慮する中、ほかの始業の施設によって給食提供事業を付帯事業と位置付けて運用している。この逆転の発想ともいえる着眼点は、現在の滝川市公共施設個別計画の中長期計画にある給食施設集約化事業を議論していくにあたって大いに参考となり、将来に対する見通しを過たないための教訓が多くあると考える。また、現在進行中の新小学校整備事業計画についても中長期の視点に立って考察すると、例えば都市計画に紐付いた故に小学校における学区再編成などの議論も選択肢から消えてしまい、老朽化問題や市民の要望が多いとはいえ、小中学校整備に関する多角的な考え方の見直しが必要であるとの結論に至った。本施設稼働前から福生市は2カ所の給食センターで給食事業を行っており、センター式について生徒や職員から要望や意見などはないかと質問したところ、「特に要望などはなく、ごく一部教職員から、「自校式のような匂いがなくて寂しい」といった返答をもらった。滝川市の所管にも、「自校式で生徒たちが給食の匂いを感じることも重要だ」との意見もあったが、市の財政的観点・費用対効果観点から鑑みるに、エモーショナルなことも重要ではあるが、持続性や確実性を重きにおいた意見発信も必要だと感じた。

- 給食センターでありながら、災害時には自動機械のおにぎりや飲み物を1万5千人分提供でき、防災拠点にもなる施設が、実際に給食を作っている様子を大きなガラス越しに見ることができました。後ろに詳しい解説パネルが並んでおり、食育の見学コースとして普段から子ども達が社会見学で利用しているのがよくわかりました。滝川市での食育は田植えや玉葱畑に行くなど、知識だけではなく実践的なものが多いので、食育としては恵まれた環境であると改めて感じられました。アメリカ軍基地が市の大半を占めていたり、外国人の人口率が東京都内で1番多かったりと福生市ならではの事情も絡んでおり、防衛費などの国の予算をたくさん活用できているため、このような大きな施設を作れていると聞き、外国人の人口が多いということから、ハラルなど多様な食文化や高齢者・乳幼児にも食事の対応ができるのかを伺いま

した。回答としては、多様なニーズに応えられるようにしているとのこと、しかし、自助も大切なことなので個人備蓄の必要性を広げる取り組みも行っているとの回答でした。滝川市での第一小学校建て替えうあ複合施設の整備においても、防災機能と多文化共生の視点を組み合わせた設計の必要性を強く感じました。

(2) 國學院大學について

ア 横浜市：たまプラーザキャンパス

(ア) 視察日時及び対応者

a 視察日時

令和7年10月21日(火) 13時00分から14時00分

b 対応者

たまプラーザ事業部長 島村 昌利 氏

同 事務課長補佐 添谷 昌稔 氏

(イ) 概要

a たまプラーザ事業部長挨拶

島村事業部長より歓迎の言葉、たまプラーザキャンパスの沿革、キャンパスと周辺地域との結び付き及び将来を見据えたキャンパスの在り方などについてご挨拶をいただいた。



b 施設及び学部等の概要

たまプラーザキャンパスは、東急田園都市線たまプラーザ駅南口から徒歩約5分の閑静な住宅街の中に位置し、キャンパス周辺は緑地も多く地域住民の散歩コースとなっている。



たまプラーザキャンパス校舎

1985年(昭和60年)3月に校地及び校舎が完成し、今年(令和7年)で開設40周年を迎えている。広大な敷地に1号館から5号館(4号館は欠)、若木21の計5棟の校舎、1から3のSPORT SQUARE 3棟の屋内スポーツ施設(アリーナ、トレーニングジム、柔道場など)、併せて、屋外に野球場、陸上競技場、サッカー場、テニスコートなどが整備されている。

また、本学創立140周年記念事業の一環として渋谷キャンパスに90余年にわたり鎮座してきた神殿がたまプラーザキャンパスに移築され、2024(令和6年)年12月16日に清祓式を執り行い、歴史的建造物として保存・継承されている。

学部は、人間開発学部(初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科)と2022年(令和4年)に新設された観光まちづくり学部(観光まちづくり学科)の2つがあり、文武両道の環境が整っている。



陸上競技場・サッカー場



若木 21



トレーニングジム

ミーティングルーム

柔道場

SPORT SQUARE 3 施設内

c 地域との繋がり

1993年(平成5年)に、「萬葉の花の会」が創設され、万葉集に登場する植物を通じて日本の自然や文化を理解することを目的とした公演講座が毎年開催されており、この講座が地域住民との交流の重要な場となり現在に至っている。また、キャンパス内の食堂や、出店しているキッチンカーも学生だけではなく地域住民にも開放している。このように、地域との繋がりを大事にし、地域の方々から感謝される学校を目指している。

イ 東京都：渋谷キャンパス(本学)

(ア) 視察(表敬)日時及び対応者

a 視察日時

令和7年10月21日(火) 15時30分から17時00分

b 対応者

國學院大學	理事長	佐柳 正三 氏
同	常務理事	武智 浩二 氏
同	理事	城所 俊哉 氏
同	法人事務局長	中村 大介 氏
同	法人事務局部長	滝田 忠之 氏

(イ) 概 要

a 理事長表敬訪問及び意見交換概要

佐柳理事長に対する表敬訪問を実施し、理事長から歓迎の言葉と今年度の北海道短期大学部への入学者など現況について説明をいただいた。委員長からは視察受入れのお礼の言葉と北海道短期部が滝川市に所在することによる経済効果や地域活性化への貢献度、出雲駅伝「優勝」による市民の盛り上がりなどについて発言した。また、委員からは北海道短期大学部開学50周年に向け、議会が行政と連携して何ができるのかを検討する旨の活発な意見もでた。城所理事からは地元から北海道短期大学部へ入学し、卒業後、地元就職することが地域のたになる。そのためには滝川市だけではなく周辺自治体を巻き込んだ広域での学生募集が必要であり、周辺自治体の協力を得たいとの意見が出され、滝川市も努力している旨を伝えた。



理事長表敬



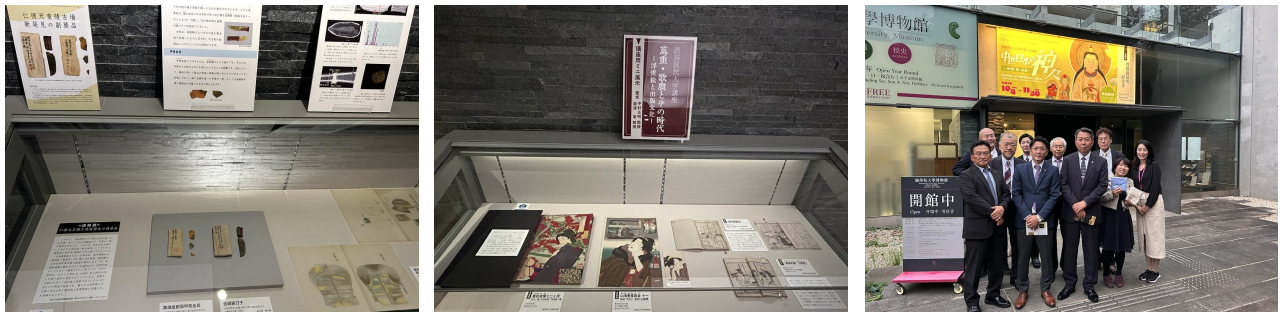
出雲駅伝優勝カップ

b 施設及び学部等の概要

今回の初めて國學院大學を訪問する議員が5名おり、大学キャンパス内にある博物館及び校舎内を視察した。渋谷キャンパスはJR渋谷駅新南改札口から徒歩で約13分の都心の高台に位置する。博物館では、佐々木学芸員から博物館全般の説明を受けた。同博物館は、大学が所有する学研究成果を発信する公開拠点として、また教育等に資する社会に開かれた施設として展開している。館内は、考古「遺跡に見るモノと心」、神道「神社祭礼に見るモノ」、校史「國學院の学術資産に見るモノと心」の3つのゾーンとテーマごとに展開される企画展示ゾーンの4つで構成されている。

校舎内は、一般教室、図書館、食堂、神殿などがあり、今回は神道文化部の授業の一端を視察した。

学部は、文学部(日本文学科、中国文学科、外国語文化学部、史学科、哲学科)、神道文化部、法学部(法律専門専攻、法律専攻、政治専攻)、経済学部(経済学科、経営学科)の4つに分かれている。



國學院大学博物館

(ウ) 視察に参加した各委員の所感

《國學院大學 たまプラーザキャンパス》

- 初めて視察をしたが、閑静な住宅街に調和した校舎、近代的かつ洗練されたスポーツ施設があり、学生が伸び伸びと学業及びスポーツに集中できる環境が整備されているとともに、大学側と地域住民が融合しており、訪問した価値があった。

- 事前にネットで画像や動画をみていたが、現地に行き細部まで見ると圧巻だった。特に、案内をしてくださった方が生徒に対する思いや情熱。施設に関しては、やはりスポーツ環境に充実しているところでした。サッカー、野球、柔道等、様々なスポーツ環境が整備されており、とても勉強になった。お話の中でも度々仰っていた「お金をかけずに頭を使う」というワードが印象的だった。

- 自治会組織やPTAを大切にしている地域連携の取り組みは参考になりました。一方通行の連携ではなく、双方向の連携にすることで、地元からの信頼が厚くなったり、地元にとってもプラスになったりすることがよくわかりました。大学施設の作り方が、上から目線ではなく、実際に使う人の立場に立ち、よく考えてる姿勢が参考になりました。

- 学業とともにスポーツにも力を入れている國學院大學。キャンパス内の野球場やサッカーもできる陸上競技場があり、さらに屋内競技施設、トレーニング施設も整備され、学生たちはのびのびと体力づくりに励んでいた。キャンパスには本市とのつながりが深い「まちづくり学部」もあり、学生は真剣に討議を重ねていた。

野球場や陸上競技場は、旧陸軍の射撃場跡地であり、先の福生市と同様、東京都内は防衛施設との密接な関わりがあるようで興味深かった。

- 大学と地域が双方向に学び合う取り組みが、人口減少が進む地方においても、教育機関が地域活性化の中心的存在となり得ることを示しており、滝川市

における今後の高等教育機関や市民活動との連携の在り方を考える上で参考になりました。

- 広大な用地に、施設、用具に驚きました。
- たまプラーザキャンパスの広大な敷地とスポーツ施設は圧巻で、学生たちのエネルギーがまっすぐ伝わってきました。担当職員の方は、元柔道の選手で、アイデアが多彩で1つ聞くと10個ぐらい全力で返してくれるような熱い方でした。ただ、施設見学をするだけでなく、様々なお話を聞くことができ、大変勉強になりました。

《國學院大學 渋谷キャンパス》

- 理事長との懇談により、本学の北海道短期大学部に対する考えや思い入れを確認できた。様々な要因はあると思うが、本市においては、短期大学部の存続は極めて重要であり、存続をするには我々も行政と協力し、地元からの入学者を増やし、地域に根付いた学校になるよう努力を傾注する必要性があると再認識した。また、博物館は3回目の視察となったが、改めて展示物を拝見して日本の古代文化や神道について学ぶことができ、感慨深いものがあった。
- 様々な歴史的重要な文化財が鎮座していた。館内も至る所が清潔に保たれており、安心して見学することが出来た。ただ一つ言うのであれば、あと1時間は見学したかったなと心残りだ。
- 博物館の内容が充実している。学生が日常的に、あのような規模の資料を目にすることができるのは、素晴らしいことだと思う。
- 私自身は3度目の本学訪問だが、いつもその変化に驚かされる。今回も佐柳理事長にご臨席を賜り、日頃から本市の短大に特段のお力をお与えいただいていることに安樂委員長とともに深く感謝の誠を表した。
懇談会では、佐柳理事長や理事の皆さんと様々な情報の交換をしながら、本市短大の今後益々の発展に期待が寄せられる時間となった。

- 多様な価値観をもつ学生が集まり、地域、企業、行政との連携も進んでおり、都市部大学のネットワーク形成力と発信力を体感しました。一方で、渋谷キャンパスからたまプラーザキャンパスへの機能分担により、学問の専門性と地域実践が両立している点も印象的で、教育機関の多拠点展開の在り方として学ぶ点が多くありました。
- 表敬訪問懇談時において、本市の短期大学において、本年度の入学数が236名となり、予定数を超えているが、今後は少子化による厳しい状況が続くことも予想される。中空知市町村が1つとして、募集体制を構築したい。(本市に対しても)明治15年の本学創設の歴史は「博物館」としては、国宝級の資料造形物が整然と鎮座され、この歴史を持って「國學院」の重みを感じた。また、國學院大學(本学)には、神道文化学科があり、全国でも数少ない神道を学び、神職の道を選考できる。本市の短大から神道文化学科への編入が可能とすれば、全国から短大への応募が増加するかもしれない。
- 視察見学などの意見交換を通じて、滝川市による短期大学の生徒獲得について、一定の評価があった反面、慢性的な幼児教育学科の欠員状態であることから、幼児教育の担い手不足問題について滝川市の考え方や方針を問われたように思われた。学校誘致による他地域からの人口獲得や街の活気だけに目をやるのではなく、若者がいかに学び、社会に還元していくやりがいを見いだせるような環境整備を市はどのように譲成していくか今後の研究課題として議論していくべきと感じた。
- 出雲駅伝優勝の号外と、当日届いたばかりの出雲駅伝優勝カップを拝見させてもらい、その大きさもさることながら、玄関口のお祝いの胡蝶蘭の数に驚きました。博物館では、日本書紀や世界最古の形式の楽譜、社会の教科書でしか見たことがない土器、そしてニュースにもなった古墳出土の甲冑金具まで展示されていて感動。子育てで足が遠のいていた美術館・博物館を12年ぶりに堪能しました。ああいった素晴らしい施設を誰でも鑑賞できるというのは、社会教育上大変意義のあることですし、近所に住んでいたら通うだろうと思います。時間が少なかったのが残念で、もっと居たかったです。

懇親会では、最上階の夜景がとても素晴らしく、学食のお米は滝川産で日本酒の國學は金滴酒造で作っていると聞いて、大学全体で滝川市との関係を大切にしているのだと感じられました。「空海の海」の字がある」ということから理事長さんが私の名前を大変気に入ってくださり、この名前がよかったと思いました。國學院大學は滝川市にとって、中空知にとっても大切な大学であり、これからも末永くお付き合いが続いてほしいです。

(3) 東京都「ALTの活用実態」について

ア 視察日時及び対応者

(ア) 視察日時

令和7年10月22日(水) 10時00分から11時00分

(イ) 対応者

東京都教育庁グローバル人材育成部国際教育企画課

統括課長代理 小西 純平 氏

企画課長代理 北條 圭太 氏

統括指導主事 松本 圭 氏

イ 概要

(ア) 総括指導主事挨拶

総括指導主事 松本氏から歓迎のご挨拶をいただいた。

(イ) JET とは何か

JET プログラムとは「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme) の略称で、地方自治体が総務省、外務省、文部科学省及び一般財団法人国際化協会 (CLAIR) の協力の下に実施している。主に、海外の青年を招致し、地方自治体、教育委員会及び全国の小・中学校や高等学校で、国際交流の業務と外国語教育に携わることにより、地域レベルでの国際化を推進することを目的としている。国内はもとより、世界各国から大規模な国際的人的交流として高く評価されており、このプログラムに係わる日本の各地域の人々と参加者が国際的なネットワークをつくり、国際社会において豊かな成果を实らせることが期待できる。

(ウ) ALT とは

ALT (Assistant Language Teacher) と呼ばれる外国人英語教育補助員。JET・ALT とともにネイティブの指導者であり、都立高校の全ての学年で、指導を毎週実施している。



安楽委員長挨拶



荻野副委員長挨拶

ウ 都立学校での JET 配置人数の拡大、研修等について

- (ア) 東京都教育委員会では、平成 25 年度から JET プログラムを活用し、段階的に配置を拡大してきている。令和 6 年の夏には、全都立高等学校での JET 参加者の複数配置（2 名以上）を実施。

JET の配置拡大を通じて、授業内外での英語を用いたコミュニケーション機会の増加を図るとともに、オンライン英会話の実施等と組み合わせ、「使える英語力」の育成を一層推進していく。

- (イ) 東京都では、授業は日本人英語教員と JET 参加者が協議をして実施。様々な授業スタイルやインタビューを通じ、JET を取り入れた授業の魅力や効果の期待がされる。

来日直後の JET に対し、東京都の教育制度や日本での生活についての知識の習得を通じて、JET としての勤務を円滑に開始するための研修。

- ・ 東京都教育委員会の JET としての勤務条件
- ・ 東京都の職員としての職務について
- ・ 日本における生活全般について
- ・ 先輩 JET による講義およびグループディスカッション
- ・ ケーススタディ

学校での教員や生徒と関わっていく中で発生しうる様々な状況を想定したケーススタディを実施している。自国と日本、それぞれの文化の差異を認識した上で、学校の一員として様々な状況に適切に対処できることを目的としている。特に、教員や生徒との綿密なコミュニケーションの重要性を繰り返し伝えている。

上記とは別に、様々な研修、講習を教育委員会と連携し、実施している。

エ 視察に参加した各委員の所感

- 東京都は、常勤の外国語補助員を JAT、日本で生活しており時間給の外国語補助員を ALT と呼称し、それぞれの学校に配置してグローバルな人材育成に尽力している。この際、活用実態で都会と田舎の大きな差異はなく運用されていることを認識した。また、トラブル発生時は人数が多いので、教育委員会ではなく現場で対応していることを確認した。

- ALT の活用実態について勉強させていただいた。滝川市とは規模感も全く異なるが、ご説明をしてくださった方の「誰 1 人取り残さない教育」という発言は心に響いた。時間があれば議場も見学をさせていただきたかったなと思った。

- 生の英語に触れる機会にとどまらず、異文化・日本人の持っていないものに触れる機会と位置づけていることが参考になった。それなら外国から招く価値があると思う。

- この度の都庁訪問は一つに「ALT の活用実態について」、都の教育委員会にお尋ねすることだったが、実態調査以上に今後の英語教育のあり方を考えさせられるものとなった。chatGPT などの AI 技術の進行により、英語教育における ALT の位置づけがどのようなものになるのかということだ。通訳機能や翻訳機能が日に日に向上する様をみて、英語教育の行く末を考えてしまった。コロナ禍を経て、人を集めて学ぶというこれまでの常識が覆され、両面を双方向で学ぶことが広く浸透した現在、ネイティブな英語に触れる方法は ALT によるもの以外の方法も考えられる。このことを深く考えさせられる視察となった。

- 英語教育の早期化や国際理解の促進において、自治体が主体的に外国人人材を活用する仕組みは、今後の地方都市における教育国際化の参考となった。

- ALTの東京都の受け入れ人数も含め本市とは、規模が違ったが、今後の受け入れ体制には国会議論の「外国人政策」が関係するのか推移をみたい。
- 学校数や人数規模の差が大きく、当初想定していた大都市なりのきめ細かい関わり方などは特に見受けられず、小回りの利く滝川市のほうが有利であるように思えた。ただし、より高い能力や魅力的なALTに対しては、しっかりとコンタクトを取り、確実に取り込もうとする姿勢は、滝川市も大いに見習うべきところであるとする。
- まず、資料が一切ないことに驚いた。ペーパーレス化が徹底されているようで、さすが日本の首都だなと感じた。滝川市も教育現場のペーパーレス化は徐々に進んでいるものの、まだまだ紙媒体でのやり取りも多く残っているため、DX化を改めて進めていかなければならないと感じた。人と人との対話・文化交流を大切にしているのが印象的で、学習環境のレベルの違いに親としては羨ましかった。教育委員会のホームページを見て、気になり質問をさせてもらった「TOKYO GLOBAL Gateway」は、英語版キッザニアのような施設だそうで、ALTの研修なども実際にそこで行っていると帰り道のエレベーター内で聞き及んだ。子どもたちとも行ってみたい。
- ALTの活用の在り方は、目的や指導方法がほぼ全国的に同じだと感じた。本市が参考とすべき点もあったので、以下にその内容を記す。
 1. TTの在り方について、学校現場に任されているようだが、実態としてALTが主導で授業展開をされているところが多いようである。
 2. JETの管理体制が確立している。(3段階管理体制)
学校現場>>>CIRの活用>>>教育委員会
 3. JETの勤務評価をしっかり行っていること。